

セッション「イギリス限界革命期前後、需給均衡理論は当初からハードコアであったか？」

“Was the supply and demand cross a hard core of the emergent approaches in the British Marginal Revolution period?”

経済学史上、限界革命についての解釈と評価については、諸説ある。極大化行動分析という数理的手法の登場に力点をおくもの、古典派の「富の学」から新古典派の「交換理論」への分析視角のシフトとみるもの、あるいは部分均衡を含みながらも一般均衡を軸とする市場均衡分析の成立としてとらえるものなどである。また、イギリス、フランス、オーストリーで同時的に展開されたが、それぞれの文脈や内容の異質性に注目する解釈もある。諸説のどれを採用するかは、時期や場所によって力点が変わるものの、基本的には現代のミクロ経済学を基礎とする市場均衡理論へ発展し収斂するものと解釈されている。とりわけ、マーシャルは、古典派ミルをベースにししながら、部分均衡の枠組みのなかで、需要サイドと供給サイドが相まって市場均衡が決定される分析装置を体系化したとされる。現代の価格理論は、ワルラス流の一般均衡理論の相互依存性とマーシャルの期間分析の理論構造を折衷的に取り入れていた均衡論的アプローチを軸としている。

しかし、はたしてイギリス限界革命期前後において、当初からマーシャルの需給均衡の枠組みが、理論の中核となるものであったのだろうか？このセッションは、この疑問を共通のテーマとするものである。この疑問は、需給均衡理論をいたずらに歴史の上座から引きずりおろすことをもくろむものではない。この疑問は、文献資料に基づきつつ、需給均衡理論を上座の中心から少しずらすことで、むしろ歴史的経緯や資料が素直に読み取れるのではないかということを提言することを狙いとする。そして、そこから読み取れる近代経済学の形成期の歴史的経緯のなかに、経済学の今後の進展の新たな地平線が見えてくるのではないかという期待をもつものである。

セッションの参加者は、必ずしも共通の研究グループではない。しかし、次の点で、共通している。リカードの貿易問題、ミルの貿易論、ミルの需給論、ソートンの需給法則批判、ジェンキンの需給均衡のグラフ、ジェヴォンズの交換理論およびデータ分析、エッジワースの数理分析と統計学、マーシャルの貿易論(1879)および原理(1890)。これらの古典派から新古典派への一連の展開が、交易条件や取引の不決定性の問題を軸として展開しており、むしろ図による需給均衡の交叉図に代表される考え方は、分りやすいがいわば手軽な解法に過ぎず、それとは異なる定式化を模索する点に一連の問題の中心課題があったということ。このことに注目している点で、参加者は共通している。そして、その多様な模索のなかで目指されていたことが、経済学史の視点から抜け落ち、あたかも、比較的容易な解法を目指して経済学の歴史がうち進んでいたかのよう

に解釈しているのではないか？この点が、このセッションの共通テーマである。

